

特集

「学びたい」という気持ちに こたえる教科書

—18年度版教科書のご紹介—

18年度版教科書は、生徒の学習への興味づけや学習意欲を喚起する工夫が満載です。今号の特集では、18年度版教科書を、生徒の「学びたい」という気持ちにこたえるという視点からご紹介します。

座

信州大学教育学部助教授
ふじもり ゆうじ
藤森 裕治

談

台東区立忍岡中学校教諭
かい りえこ
甲斐 利恵子

会

光村図書出版(株) 編集部 顧問
かわい あきお
河合 章男



今の中学生は変わったのか

甲斐 教科書を編集する際に、「今の子どもに適したものを…」という要望があります。しかし、わたしは、自分が初任のときの中学生と今の中学生とでは、本質のところは変わっていないという印象をもっています。この二十年の間、中学生を取り巻く環境は変化したと思いますが、おもしろいことが大好きで、同じことを繰り返す

のは嫌い、そして、ちょっと背伸びしたことにものすごく意欲を燃やす…、そういう姿は本当に変わっていませんね。

藤森 携帯電話の普及など、現象面で変わったところはいろいろあると思いますが、わたしもやはり中学生の本質的なところは変わっていないと思います。子どもたちの大事なところは変わらないのに、我々大人がそれを見失っている。むしろ、

言葉って自分自身だと思っんです。

変わったのは大人のほうかもしれないですね。中学生が本来もっている潜在的なパワーを引き出し、それを伸ばすサポートを我々がどれだけできるか、ということにかかっていると思います。

甲斐 あえて変わった点を挙げるならば、ビジュアルなものに対する感覚が研ぎ澄まされてきたと思いますね。イラストや文字を組み合わせたとき、昔の子どもたちだったら考えなかったような配置をすることがあります。それから、話をするときや聞くときのコツのつかみ方は上手になっているようにも思います。映像の多様化、情報の多様化、伝達手段の多様化などが、子どもの体に染みついていくように感じます。

藤森 とにかくメディアが爆発的に多様化していますが、あれだけの情報の中で今の子どもたちは溺れずに、上手にサーフィンをしていくわけですね。情報があふれる社会の中で、本質を見誤らない舵取りができる力をつけるということが、教科書にも求められていると思います。

河合 わたしも、本質という面では確かに変わっていないと思います。しかし、振る舞



河合 章男（かわい あきお）

光村図書出版(株)編集部 顧問。
1950年生まれ。中学校教諭を務めた後、文筆活動に入る。大妻女子大学、日本女子大学講師を務める。著書に、評論集『子規の近代』(新曜社)、句集『私の行方』(沖積舎)などがある。
光村図書中学校国語教科書編集委員を務める。

いとこのことに着目すると、二十年くらい前の生徒たちとは違うところもあるなという気がします。極端な例ですが、先生が質問をしたら、多少わからなくても手を挙げなさい。」という形式的な要求をしたときに、たぶん昔の生徒はそれに従って付き合ってくれたと思うんです。でも今の生徒たちは、そういう振る舞いを拒否する。なぜかといえば、本音で振る舞うことが許される時代になってきた。もちろん、それはいいことなのですが、その変化に教師がついていけないところもいくつかあるんじゃないかな。

言葉を獲得するということ

甲斐 言葉を獲得するときって、どうしてあんなにうれいんでしょうね。わたし自身もそうです。子どもたちを見ていると、本当に言葉の学習が好きなんだと実感します。

河合 言葉って自分自身だと思っんです。獲得した言葉は自分の一部だからこそ、自分が書いたものを勝手に直されたり、先生に否定されたりすると、本当に腹が立つたり悲しくなったりするんだと思います。自分をくっつけている時期の中学生にとっては、言葉を

獲得していくのは切実な問題なんです。

甲斐 そんな子どもたちですから、言葉の単元を扱うときは、こちらもがんばらなくちゃ、という感じになります。十八年度版教科書は、どこを開いても言葉についての話題が散りばめられているのがうれしいですね。例えば、単元の扉に位置づけられている「言葉を楽しむ」は、美しい写真ともども、このページを開いた子どもたちも真っ先に目を留めそうです。我々にとっても、教科書全体が授業の始まりやちょっとした時間に話題にするコンテンツ集のような感じにもなっていて、自然に言葉が身につく構成になっていると思います。

藤森 この時期の子どもたちにとっては、対人関係の中で自分の存在や考えを追い求める気持ちと、言葉を自分の血や肉にしていこうとするエネルギーとは、とても近いのではないかという気がするのです。ですから、自分の思いや考えを言葉にのせてきちんと伝え、そして、他者と触れ合うことを通して、今度は自分のものの見方や認識を豊かにしたり深くしたりする。そういう三年間にわたる学びの大きな流れを、教科書の中に込めたいと思いました。



「国語」1 第1単元扉
「言葉を楽しむ」 花便り



「国語」2 第4単元扉
「言葉を楽しむ」 錦秋



「国語」3 第2単元扉
「言葉を楽しむ」 海鳴り

今何を学んでいるのか、子どもたち自身が考えなければいけないと思うんです。



甲斐 利恵子 (かいりえこ)

東京都台東区立忍岡中学校教諭。
1955年生まれ。著書に『子どもの情景』(共著・光村教育図書)、『聞き手話し手を育てる』(共著・東洋館出版)、『中学教師もつらいよ』(共著・大月書店)がある。
光村図書中学校国語教科書編集委員を務める。

決め、学習のスタートからゴールまで考えているのに、それを子どもたちに説明していませんでした。別の言い方をすれば、子どもたち自身に、今何を学ぼうとしているのか、何を学びたいのか、どうやって学ぶのかについて、考えてもらおうとはしていませんでした。

藤森 「ゴールだけを目標と、いつの間にかベルトコンベアの上を夢中になってただ走っているだけで、気がついたらいつの間にかゴールだった、ということにもなりかねませんね。

甲斐 その点について十八年度版教科書の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材では、目標をきちんと立てたうえで、どう学習の流れがあつて、どういふことを学んで、次へつなげるためには、どこまで到達してもらいたいという、そんな学習の道筋を示せたと思います。そのことについて子どもたちは、自分は何を学ぶのか、学びたいのかという学習の構想力を身につけられるのではないかと思うのです。

自分から学習に取り組もうとする姿勢

甲斐 今までの国語の授業全般を振り返ってみると、なんのための授業をしていて、自分はどこに連れて行かれるのか、子どもたちがわからなかったように思うのです。教える側としては、単元の目標を

河合 大人たちは忘れていかもしれないけれど、言葉を獲得していくことは、子どもたちにとっては切羽詰まったことなのかもしれない。その子の世界観とも重なるものなものですから。そういう意味で、どういふ言葉をどういふことによって学んでいくかというところは、ものすごく大切なことですね。

した。これがいわば、一種の牽引力(けんりょく)になって、「みんなの前で気の利いたことを言ってみよう」という思いにつながるわけです。

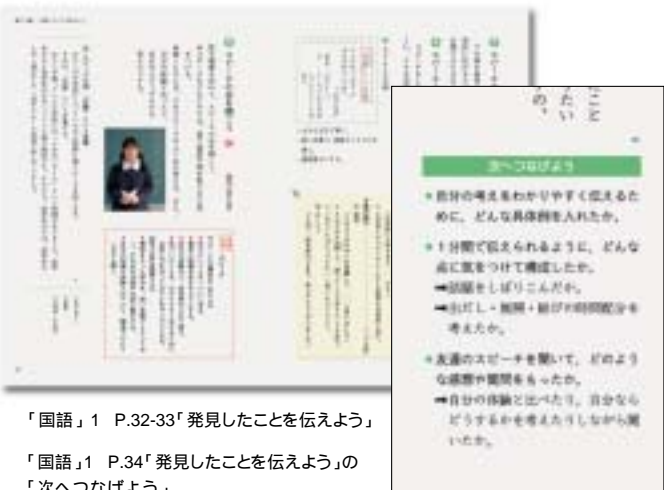
甲斐 今、授業時数が削減されている中で、家庭での学習が貴重なものになってきていますが、現実にはなかなか取り組めていません。子どもたちが学習の構想力を身につければ、自分で学習することができるようになるのではないのでしょうか。

藤森 さうして、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材では、こんなふうに人前で発表すればいいんだという「ゴール」が、例として示されています。また、新設した「次へつなげよう」「目標」に対する「振り返り」として評価の観点を示しました。発表するという活動はその後も出てくるわけですが、「ここでの学習の区切り」として振り返ってみようというわけです。自己評価を促す大事なかけですよね。「学習の窓」もありますしね。

河合 「学習の窓」は現行本でもかなり機能していると思うのですが、さらに磨きがかかりました。一つ一つのねらいが研ぎ澄まされて、子どもたちにとっては、学習を自分で身につけていくための重要なツールになったと思います。付録に新設された

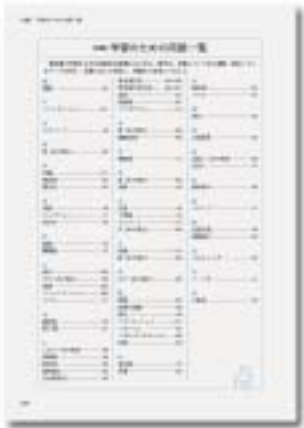


「国語」1 P.30-31 「発見したことを伝えよう」



「国語」1 P.32-33 「発見したことを伝えよう」

「国語」1 P.34 「発見したことを伝えよう」の「次へつなげよう」



「国語」3 P.269
【付録】学習のための用語一覧」

「学習のための用語一覧」というのも画期的ですね。こうした一覧表は、数が多過ぎると、子どもたちは見ただけでうんざりしてしまつたのですが、ページに精選されているので、ちよつと国語に自信のない子ども、このくらいだったならなんとかなると、考えてくれるのではないのでしょうか。

学習している自分を確認できるしかけ

甲斐 今回の教科書は、メタ認知というか、学習している自分を客観化できるような場面が随所に散りばめられています。「次へつなげよう」「もそつだし」「学習のための用語一覧」や「学習の窓」もそうです。これらは、ただがむしゃらに学習するのではなく、自分が今どこまで来ているのか、どんなことをしているのかというところを認めてくれるツールです。例えば、学習をする「こと」に、「用語一覧」の項目にチェック印を付けていくと、こんなに学習したという道筋が残ります。自分がどれだけ学習したのか、自信にもつながるし、喜びにもなると思つたです。



「国語」1 P.100-101「話し合つて考えよう」
「国語」1 P.103
「話し合つて考えよう」の「学習の窓」

藤森 自分にふさわしい学び方を自分の中に構築していく。これが本当の意味でのメタ認知だと思つたんです。それができる例の一つとして、一年の話すこと・聞くこと教材「話し合つて考えよう」のグループ・ディスカッションが挙げられます。ディスカッションを始めていくと、活動が必ずしも活発にいかずに、停滞したり立ち止まつたりすることがあります。そういうときに、それぞれの子どもの中ではこんなことが起きているから、こんなふうに立ち止まつたり、あるいは振り返つてもいいという工夫

センが「学習の窓」に書いてあるんです。

河合 そこで学習したことが次の学習で使えるようになるためには、子どもの頭の中で一般化ということが行われなければいけません。法則として意識的に自分で身につけていくということなんです。教科書の中でもそういったことを認識できる部分があれば、学習の定着、学力の定着につながっていくと思つたんです。

子どもの読む意欲を引き出す工夫

河合 今、子どもたちは、言葉だけではなく、いろいろな種類の情報がいくらでも手に入る状況の中で生きていくわけなんです。彼らにとつて役立つ「読む力」とは、と考へたとき、文字だけではなく、理解を助けるさまざまな資料を提供するということと、子どもたちの読む意欲にもつながっていくと思つたんです。

藤森 十八年度版の教科書はB5判で大判になるんですが、その利点を最大限に生かして、子どもの読む意欲を促しています。例えば、近代文学や古典教材などは、時代

自分にふさわしい学び方を自分の中に構築してほしい。



藤森 裕治 (ふじもり ゆうじ)

信州大学教育学部助教授。
1960年生まれ。専門は、授業コミュニケーション論。著書に、『対話的コミュニケーションの指導』(明治図書)、『死と豊穡の民俗文化』(吉川弘文館)などがある。
光村図書中学校国語教科書編集委員を務める。

甲斐 「学習を広げる」に入っている資料の「本との出会い」にも、子どもたちが好きな本がたくさん出ているんです。子どもに読んでもらいたい本と、子どもが読みたい本にギャップがある場合もあります。ここで紹介している本は、どれも子どもの反応が目に見えます。絶対におススメの本ですので、ここに載っている百冊は、ぜひ図書館に入れていただきたいですね。(→P12の紙面紹介参照)

藤森 教育の世界では多読というのが非常に注目されていますが、教科書の中で、子どもたちが夢中になって読める本を、どれだけ手控えているかということが大事だと思います。十八年度版の教科書では、写真付きで六十六冊、そのほか、資料のページに百冊、全部で百六十六冊紹介しています。

背景の理解が困難という意見がよく聞かれました。今回は思い切ったレイアウトで資料を提示し、まずはその作品の世界に浸つたり、学習途中で参考資料としたりして、子どもの学習への興味づけを行う構成になっています。(→P14の紙面紹介参照)

書案内」のページにも着目してほしいと思つています。本の紹介は、表紙の写真も入れることによつて子どもたちに印象深くなるように配慮し、手にとつて読んでみたくなるように工夫しました。さらに、図書館での本の探し方、読書記録の付け方などを、ページではありますが、各学年に掲載しています。(→P12の紙面紹介参照)

河合 三年間でこれだけの本を読破したら立派です。グラフやチェック欄がついていますから、それを使って達成感を味わつてほしいですね。自分から進んで読む、本が好きだから読む、という理想像がわたしにはありますが、子どもたちが自然に本を手にしてしまつというページ作りを心がけました。

「学習を広げる」を効果的に生かす

藤森 新設された「学習を広げる」ですが、これは単なる付録ページではありません。例えば、三年の「二つの悲しみ」は現行版にもありますが、これは文学なのか、それとも非文学なのかというところで、以前かなり議論をしたことがあります。この作品が資料に位置づけられていることによつて、いろいろな扱い方ができると思つています。例えば、言語資料として扱うことも可能です。教科書を資料化して使うという方向があると、教科書全体が俄然違つて見えてくると思います。



河合 わたしは、現場にいたときには授業の遅い教師だったので、たぶん、今、教壇に立つても、「学習を広げる」までやることはできないだろうなと思うのです。だから、わたしだったら、まずこの部分を子どもに渡してしまつて、どれだけ自分で使えるか。そういう使い方をしますね。生徒たちは、結構おもしろがつて読んで、活用してくれるんじゃないかと思つているんです。

甲斐 わたしは、どんな使い方をしようかと、今からワクワクしているんです。読み物以外に、表現のテーマ例や原稿用紙の使い方、情報の集め方なども載っていますから、単元の学習の前でも後でも、途中でも使えるし、家庭学習にも使えると思います。自主的な学習を課題に出すことがあるんですが、子どもたちは、「たいへんだけど、おもしろい。」「みたいなことを言っているんです。だから、「学習を広げる」を「メント」に自分で勉強させるといふのもいいなと考えています。

河合 教科書の本編の部分には矢印のマークがついていて、資料のページとの関連を示しています。(→P13の紙面紹介参照)勉強しているとき、「学習を広げる」の中に



こんな資料があるとだれかが気づいたら、みんなに紹介していくとか、いろいろな場面で生徒が辞書のようにつづいていくこともできるのではないのでしょうか。個々の力に合った手助けになると思います。

甲斐 確かに、辞書のような要素がありますね。とれかを丸ごと「」扱わなくても、一部を切り取つて使うことが出来るページですね。授業時数が少ない中で、「学習を広げる」は、負担になるのではなく、大きな手助けになるのではないのでしょうか。

どんな部分でもいいので、子どもたちには、まず教科書に愛着をもつてほしい。

甲斐 本編のほかに「学習を広げる」があるとはじめても、ページ数は現行本よりも減つているわけですから、子どもたちも、ゆったりした気持ちで取り組めるのではないのでしょうか。「この教科書は、隅々にまで子どもたちへの配慮が行き渡っていますね。」

河合 目次のイラストをよく見ると、こんなところに宮沢賢治がいるとかね(笑)。

甲斐 そういった細かい技も散りばめられています。どんな部分でもいいので、子どもたちが、まず教科書に愛着をもつてくれたらいいですね。

藤森 この教科書をパラパラめくつていくと、他愛ない発見をしたり、好きな作品を見つけて予想外にのめり込んだり、さまざまなことが期待できると思います。まずは子どもたちの反応を見たいですね。

甲斐 わたしには、今からまつ、子どもたちの反応が目に見えてきます。

河合 願いも込めてですが、「この教科書」を使えば子どもたちはきっと国語が好きになると、わたしは固く信じているんですよ。

甲斐 そこからが本場の国語の学習のスタートですね。



「国語」2 P.218-219 「発想を広げる」



18年度版教科書は、 子どもの「学ぶ意欲」を刺激します



▲「国語」3 P.38「相手を意識して伝えよう」の「次へつなげよう」

「話すこと・聞くこと」「書くこと」教材の最後には、「目標」に対する「振り返り」としての自己評価の観点を示しました。ここでは、学習で身につけた力を再認識することができます。

**どんな力がついた
のかがわかる**



▲「国語」1 P.8-9「学習の計画を立てよう」

**これからどんな学習を
するのかがわかる**

新しい学年のスタート。生徒は、これからの生活に期待を膨らませていることが予想されます。「学習」の計画を立てよう。「は、一年間の学習内容を一覽にしました。学年の始まりに、生徒自身が「どんな教材で、どんなことを学習するのか」を把握する「は、は、は」を通じて、受け身ではない「国語学習を意識する」ことが出来ます。



▲「国語」3 P.37「相手を意識して伝えよう」の「学習の窓」

学習する中で身につけた力を「学習の窓」で示しました。生徒が「どんなことを意識しながら学習を進めていけばよいのか」、そのポイントを確認することができます。

**どんなことを意識して
どんな力を
つければよいかわかる**



▲「国語」3 P.34「相手を意識して伝えよう」

**何をどう学んで
いくのかがわかる**

「話すこと・聞くこと」「書くこと」教材の最初に、「目標」と「学習の見通し」をもつ「の欄」を設けました。生徒自身が、何を目標に学習すればよいのかを自覚し、今何を学んでいるのかを理解できるようになりました。

子どもの「読みたい」「知りたい」と 思う気持ちを後押しします

もっと知りたい

本編のほかの教材や、学習を広げる「の資料など」に関連しているページを ↓ マークで示し、適宜参照できるようにしました。学習の参考にしたり、実際に活用したりして、生徒の「もっと知りたい」という意欲にこたえます。

▼「国語」2 P.185



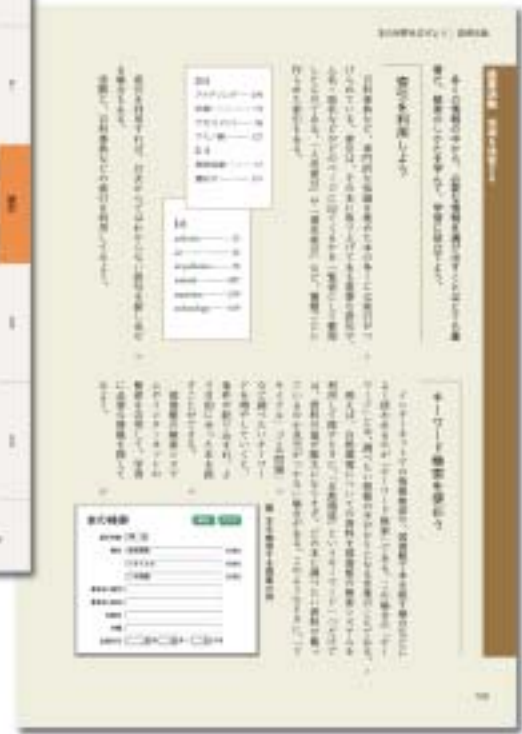
▲「国語」2 P.220



▲「国語」2 P.72-73「読書案内」



▲「国語」2 P.226-227「本との出会い」



▲「国語」2 P.156「読書活動」

もっと読みたい

「読書案内」のページは、生徒が思わず手にとって読んでみたくなるように、内容の紹介と合わせて表紙写真も提示しました。生徒の「もっと読みたい」「もっと調べたい」という気持ちにこたえるために、図書館での本の探し方や索引の使い方などを示した「読書活動」のページを設けました。

大きな紙面が子どもの学習をサポートします

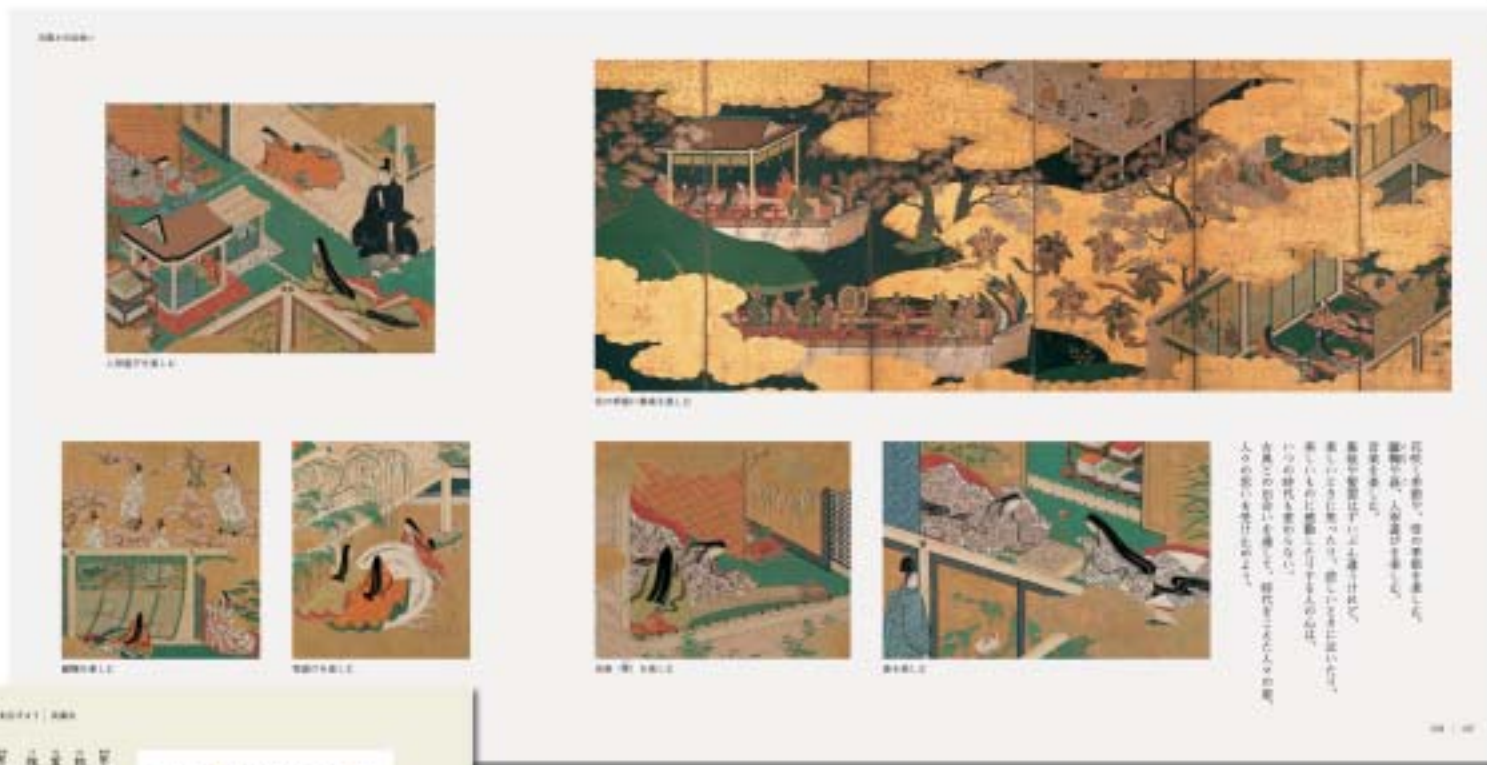
教科書紙面が、一回り大きなB5判になりました。

教科書が一回り大きくなったことで、脚注欄が広まりました。余白を利用して学習中に気がついたことや感じたことを、その場でメモすることができ、学習を振り返るときにも役立ちます。

気がついたことを
すぐにメモできる



▲「国語」2 P.132



▼「国語」1 P.107-109「古典との出会い」



▲「国語」3 P.77「高瀬舟」



▲「国語」3 P.128-129『おくのほそ道』俳句地図

時代背景の解説や作者紹介など、基礎的な理解の助けとなる資料を教材のそばに配置しました。特殊な語句については、脚注欄に、図や写真とともに解説をつけています。豊富な資料に支えられ、生徒は国語の学習にじっくり取り組むことができます。

「なるほど」から学習に取り組める